

---

# 恋愛映画を話そうよ

村上サガン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

恋愛映画を話そうよ

### 【Nコード】

N9839P

### 【作者名】

村上サガン

### 【あらすじ】

恋愛映画について話したいと思います。

小学生の頃「カサブランカ」を観て、そして中学生で「めぐり逢い」を。

いつのまにか恋愛映画が好きになりました。

でも若い頃はアクション・サスペンスものを圧倒的に観たものです

が、

映画産業が斜陽化してからは、

だんだんアクション・サスペンスものは僕の中で陳腐化してゆきま  
した。

たとえばサスペンス映画はヒッチコックで完全にストップしたよう  
です。

## 映画「ホリデイ」からはじめます

映画 「ホリデイ」(2006)「

ホリデイ The Holiday

監督・脚本 ナンシー・メイヤーズ

出演 キameron・ディアス、ケイト・ウィンスレット  
ジュード・ロウ、ジャック・ブラック

2006年制作の、この映画は21世紀の作品の中で、

恋愛映画について多くのことを語っていると思い、

真っ先にとりあげます。

私がいつも主張していることを、この映画は語ってくれます。

それは恋愛成就したい、恋愛に悩んだら、昔の恋愛映画を観るべき  
だということです。

この映画は2組のカップルが登場します。

ひとつはキameron・ディアス(アマンダ)とジュード・ロウ(グ  
ラハム)

ジュード・ロウって ハンサムですね。

イギリス的なハンサムはちょっと好きになれないけど

こんなフランス的な美男もいるんですね。

私的には、よくある話で、あまり新鮮味はない。

それに、ある時期からキャメロン・ディアスの人相が変わって、

「ベスト・フレンズ・ウェディング」「メリーに首ったけ」に出演していた頃の可愛い彼女の笑顔はなくなったように思います。

この映画がとても気に入ったのは、もうひとりのカップル、

ケイト・ウィンスレット（アイリス）とジャック・ブラック（マイルズ）。

この三枚目の顔をした両者の話しです。

それに大昔の脚本家イーライ・ウォラック（アーサー）がからむ。

アイリスは好きな男性に、二股をかけられ失恋したと告白します。

それを聞いたアーサー老人は言う。

「映画には主演女優とその親友が登場する。

君は主演女優だ。

なのに親友役を演じてる」

「言う通りね。自分の人生だから主役のはずね」

そしてこの老人は名作映画を教えるから、それで勉強しなさいと言う。

まさに、この言葉です。

過去に多数ある恋愛映画からいろんなことを学ぶことができると思います。

## ラブストーリーは冬

「ホリデイ」の監督脚本ナンシー・メイヤーズは語る。

「ラブストーリーは冬なの。」

大好きなのは、クロード・ルルーシュ監督の『男と女』（66）。

この映画から学んだことは多いわ。

『ホリデイ』を冬のホリデイシーズンの物語にしたのは、

ラブストーリーは“寒い”設定でないといけないと思うから。

温かさやぬくもりを見せてくれるのは、2組の恋人たちなのね」

韓国ドラマ「冬のソナタ」もしく、ラブストーリーの名作は冬が多い。

冬は恋愛映画の必須アイテムだろうと思う。

私が印象深いのは「ある愛の詩」の雪上シーンで、

「冬のソナタ」に、これとそっくりのシーンがある。

とにかく「冬のソナタ」は、

これまでの有名な古典恋愛映画の良いところの集合である。

私が好きな恋愛映画は

レオ・マツケリー監督脚本の「邂逅（めぐりあいと読む） 1939」  
で、

彼はこの作品に愛着があるのだろう。

1957年にケーリーグラント、デボラカーでリメイクしている。

そのリメイクで目立ったのが雪で、

最後はニューヨークの無人の雪上シーンで終わる。

「めぐり逢い」には

いくつも有名なシーンがあるが、

今回は冬ということで

＜思い出のない冬はつらいわ＞についてお話しします。

後世のいろんな映画に影響を与えた「めぐり逢い」の  
オマー・ジュ作品「めぐり逢えたら」から引用してみます。

メグ・ライアンとその友人がDVDで「めぐり逢い」を観るシーン  
がある。

デボラカー ＜愛していたわ＞

メグ・ライアン 「この頃は本当の愛しかたを知っていたのよ」

ケーリーグラント ＜約束しよう＞

デボラカー <約束だなんて怖いわ>

ケーリーグラント <この幸せをつかまないのはおろか者>

デボラカー <愛の思い出のない冬は寒いわ>

すると友人が 「このシーンが大好きなの」

二人はグシャグシャに大泣きして言う

「男性陣にはわからない映画よ。 そうなの。 無理よ」

この場面は私にはピントこないが、女性には大事な会話のようです。

この「めぐり逢えたら」で流れる「めぐり逢い」の訳は中途半端なので

「めぐり逢い」でのセリフをあげます。

デボラカー 「思い出のない冬はつらいわ。 春は過ぎたし」

ケーリーグラント 「そう最後の機会だ」

デボラカー 「私にも？」

ケーリーグラント 「逃したら最後さ」

デボラカー 「怖いと言わないで」

ケーリーグラント 「幸福を逃したら後悔する」

X X X

ケーリーグラント 「半年努力する。その時君はどこにいる？」

デボラカー 「何を言いたいの？」

ケーリーグラント 「つまりその時に結婚して欲しい」

デボラカー 「最高の殺し文句だわ」

（横道）マツケリーは

1937年スクリーン・ボール・コメディ「新婚道中記」をつくり、  
見事アカデミー監督賞を獲得、

同年に小津安二郎の名作「東京物語」に

大きく影響を与えた「明日は来らず」をつくる。

## 印象深い失恋シーン

映画「ホリデイ」で

失恋した時の

ケイト・ウィンスレット（アイリス）の以下のセリフが気に入った。

「私は愛されてないってわかったわ。

こんな時は自分がちっぽけに思えて

心がきしんで、ズキズキ痛むのよ。

髪型を変えてもジムで汗を流しても、

女友達とワインを飲んでも駄目

毎晩ベットで彼の思い出にふけり、

自分の何が悪かったのか思いをめぐらせる、

一瞬でも幸せだと思った自分を哀れみ、

彼が戻るかもしれないと心の片隅で期待する」

それでは他の映画で

印象深い失恋シーンをあげていきましょう。

まず「NANA」でのハチが章司に失恋するシーン。

章司が新しい恋人幸子といるのを目撃してしまう。

ハチは何も言えずに傍観しているので、ナナがハチに向かって言う。

ナナ 「ハチ公！ 何、傍観してんだ！

てめえのケンカだろ！

てめえがやれ！

戦わなきゃ 負けだぞ！

てめえの男だろ！ 取り返せ！」

ハチ「 いない . . . . .

もう . . .

顔も見たくない . . . . .」

ハチは泣きながら独り言を言う。

「裏切りを許せる程

大人にはなれなくて

傷ついても、すがりつける程

一途にもなれなかった。

あたしの負けだよ」

## ダンスで失恋がわかる

「グローイング・アップ」 （1978）

ベンジーは親友のボビーやヒューイと連れだって

ディスコでガール・ハントをする毎日を送っていた。

そんなある日、

彼は同じ学校に通う美しい少女ニキに一目惚れしてしまう。

しかし、あるダンス・パーティの夜、

チークタイムで暗くなった会場で

ニキが親友ボビーとしっかり抱き合うように

踊っているのを、彼は目撃してしまう。

「ミスター・ロンリー」 の悲しい

テーマが流れる印象的なシーンです。

このシーンの情景は、

大滝詠一の「恋するカレン」で歌われていて、そっくりです。

歌詞

キャンドルを暗くして スローな曲がかかると

君が彼の背中に 手をまわし踊るのを

壁で見ていたよ

フられると わかるまで 何秒かかっただろう

誰か話しかけても ぼくの眼は上の空

君に釘づけさ

そして これらの原点はテネシーワルツではないかと思うのです。

「古〜い」 「まあ そういわず」

綾戸智恵（JAZZピアノ弾き語り）さんの十八番ですね。

これは 恋人とテネシーワルツを踊っていたら

旧友に彼氏をとられてしまったという話です。

歌詞

私は彼とテネシーワルツを踊っていた

その時に古い友達と偶然出会ったの

私の恋人を彼女に紹介したわ

すると彼らはワルツを踊り

いつのまにか 二人はずっと踊っていて 離れないの

あの夜を思い出すわ

そしてテネシーワルツを

今、どんなに大きなものを失ったかが分かるの

そう、私は大切な人を失ってしまった

美しいテネシーワルツが奏でられていた

あの夜・・・

## ダンスで失恋がわかる（後書き）

横道>「グローイング・アップ」に登場するベンジーは椎名林檎の「丸の内サディスティック」に登場するベンジーと関連しています。

## 虹の女神にみられるリアルな失恋

印象深い失恋シーンは他にもいろいろとありますね。

「花と男子」での、滋のいさぎよい失恋ぶりは、あまりにさわやかで気にいっています。

ユーミンの歌で「DANG DANG」

あなたにふさわしいのは・・・

私じゃないって

電話を切ったあとに・・・

思い切り泣いたあの日・・・

ユーミンの失恋ソングは

中島みゆきと違ってドロドロしていないだけ、みにしみますね。

きりがないので、失恋の話は以下で終わります。

「虹の女神」です。

2006年公開の邦画で、その内容のリアルさに驚きました。

この映画は章に分かれていてその5章が「失恋」となっている。

このセリフがもう頭から離れない。

智也とおおいの会話です。

あおいは智也のことが好きなんです、智也は気づかない。

智也「さみしいな 俺達」

あおい「さみしいね」

智也「さみしい者同士 つきあうか。

おれら 相性はいいと思うんだけどな」

あおい「そう？」

智也「そうだよ 何が 足りないんだろうな。

ちょっといい」

智也が抱きしめる

あおい「酔っているの」

智也「酔ってないと こんなのできないよ。

酔っているからかな 女を感じない。

でも この程度で結婚を決めちゃう奴もいるんだろうな」

あおい「ちよつとさ そんなこと」

智也「結婚してみるか 俺達 一度」

あおい突き放す

智也「いてっ 冗談だって」

あおい「冗談で プロポーズする奴がいるか？」

取り消せ この野郎！

もし このあと誰からプロポーズされなかったら  
今のお前のひと言が一生残るんだよ。

それがわかって言ってるのか この野郎

人の人生むちゃくちゃに しゃがって

お前は何なんだよ」

智也「ごめん あやまる」

あおい「お前は何なんだよ

こんな自分が嫌になる

なんで なんて謝るんだよ

フェーストキスも 奪いやがって

もう何か もう 自分が・・・」

この智也のプロポーズは女性には侮辱だけど、

照れ屋の彼はマジに近いものなんですよね。

これが男なんですね。

〓 〓 〓 〓

それから6章の「恋人」での失恋の会話です。

智也に千鶴という彼女ができるが、

その女性は年齢を8歳もごまかしていて、  
そのことが、彼女の免許証をみて発覚する。

千鶴「あれ 歳とか気にしないんじゃないの？ なかったの？

34歳じゃ いけないの？ そうなの？」

智也「あ！ そうは言ってないけど」

千鶴「でも 年齢とかで愛情が変わるのだったら悲しいな

私だって いつかは34になるのよ

その時は嫌いになるの？」

智也「今の歳が知りたいんだけど」

千鶴「26って言っているじゃない」

智也「嘘はつかないで」

千鶴「言っても何も変わらないんだっただけ」

智也「何も 変わらないって 例えば？」

結婚のこととか

ほんとに34歳だったら

家族ぐるみで俺のことダメしてたってことになるじゃん

そんな家族とは結婚できないよ」

千鶴「家族は関係ないでしょ 私とあなたの問題じゃない

約束して 何も変わらないって

そしたら ホントのことを言う」

智也「妊娠は うそでしょ」

千鶴「最初に 約束して そしたら話す」

智也「そんなの ひっかからないよ。

何も言わなくていいから 出てってよ」

千鶴「26よ ホントよ」

智也「でも34にしか見えないよ、出てってよ」

千鶴「34よ でも ホントのことを言ったら つきあってくれた？

バツイチだって言ったらつきあってくれた？」

智也「バツイチ、それも聞いてないんだけど」

千鶴「さよなら」

## ノルウェイの森／＼お別れは握手でなくてS

小説「ノルウェイの森」の最後の方で主人公が、

レイコさんと初めてセックスして別れる場面がある。

これって僕にも経験があるので、普通に理解できた。

しかし他の方での非難や疑問だと言う人が数多い。

これがこの小説をエロ小説だと言っている理由のひとつのようだ。

そして女性にも多い。

直子がいて、緑がいるのに、主人公の行為がわからないと言う。

なるほど、そういう考えもあるのだと勉強になった。

まず日本で一番売れた小説「ノルウェイの森」について、

僕的な解釈で話をさせてもらおうと

主人公ワタナベトオルには高校時代に唯一の親友キズキがいる。

そして直子、彼女はキズキの恋人であり、

主人公もキズキを通して直子と親しくなり好意を持っていた。

キズキは自殺してしまった。

大学に進学した主人公は直子と再会して交わってしまう。

ここからミケランジェロ・アントニオーニの映画「情事」（1960）

と同じような愛の不毛に陥る。

映画「情事」では女性2名、

アンナとクラウディアとサンドロの三角関係で、

アンナとサンドロが恋人同士だ。

3人が旅行した先でアンナが失踪してしまった。

二人はアンナを探すうちに交わってしまう。

そしてとうとうアンナは完全に行方不明となる。

二人は常にアンナの影を背負ったままの愛しかたをする。

ある夜、酔ったサンドロは見知らぬ女を抱いた。

不安の一夜を明かしたクラウディアは

そんなサンドロの姿を発見して絶望する。

しかしサンドロの方もその気持は同じだったにちがいない。

サンドロは戸外のベンチで一人男泣きに泣いた。

その肩をつしるから、おいかけてきて、  
そっと抱いたのはクラウドディアであった。

|||||

この一人の影におびえる喪失感ただようセックスは、  
直子の方に痛烈にある。

直子は言う。

「私はあなたが考えているよりずっと深く混乱しているのよ。  
どうして私を放っておいてくれなかったのよ」

キズキの影から逃れられないのだ。

僕なら直子とは交わらない、そんな気にならないからだ。

しかし主人公トルは直子と交わって恋愛をしていこうと思う。

もうそこで僕的にはこれは危ういと思った。

直子は精神的に病んでしまい、精神病院に似た施設「阿美寮」に入る。

ここは映画「17歳のカルテ（1999）」のような施設だ。

そこで直子と同室の40歳代のレイコさんと知り合う。

直子の見舞いに通うごとにレイコさんとも親しくなっていく。

レイコさんはかつてピアニストを目指していたが挫折し、

3 回にわたって精神病院に入院。

「阿美寮」には8年間入所しており、患者たちにピアノを教えている。

ギターも得意であり、横浜に別れた夫と長女がいる。

このレイコさんとの交流を読んでいて、

僕は直子よりレイコさんに魅力を感じていた。

そして直子が自殺する。

トオルは小説の冒頭で嘆く。

直子は言った。

「私のことをいつまでも忘れないで。

私が存在していたことを覚えていて」と。

そう考えると僕はたまらなく 哀しい。

何故なら直子は僕のことを愛してさえいなかったからだ。

この言葉は一度愛した女性を亡くした自分にはずんと来ます。

直子はレイコさんに自分の服を全部あげると遺言していた。

直子の服を着たレイコさんをみて、トオルは嬉しかった。

2人だけで、直子の葬式を行うことにする。

お葬式は楽しい思い出にするために、レイコさんはギターを弾いた。

そして「ねえ、ワタナベ君、私とあれやろうよ」

「不思議ですね。僕も同じこと考えてたんです」

そしてお別れのセックスを行う。

この場面は、映画「おもいで夏（1971）」がかぶります。

映画「おもいで夏」はドロシーという夫のいる年上の女性に恋焦がれる少年ハーミーの話し。

ドロシーの夫が戦死する。

そんな悲しさをまぎらわすために、ドロシーはハーミーを夕食に招く。

ハーミーは盛装してドロシーの家を訪れた。

するといつも夫婦が聞いていた曲が流れていて、

テーブルの上にはドロシーの夫の戦死を知らせる電文があった。

じつと立ちつくしたハーミーの前に、泣きはらした顔のドロシーがいた。

彼女はハーミーを踊りに誘い込んだ。

ハーミーはただ黙って誘われるままに踊った。

ドロシーはハーミーの胸に顔を埋め、とめどない涙を頬に伝わらせた。

踊りながらベッドに誘うドロシーの悲しみを、

ハーミーには理解することができなかった。

ドロシーのベッドで朝を迎えたハーミーは、  
彼に宛てた一通の手紙を発見した。

「昨夜のことは、あなたがおとなになった時、  
きっと理解してくれると思います。

私は実家に帰ります」。

喪失感を埋めるためのセックスがあるんだと、  
それには男女差はないと僕は思った。

|| || || ||

さて横道したがノルウェイの森、  
セックスを終えた後のレイコさんの言葉。

「私もう一生これ、やんなくていいわよね？ねえ、  
そう言つてよ、お願い。

残りの人生のぶんは、もう全部やっちゃったから安心しなさいって」

レイコさんが北海道に旅立つ日に、トオルは上野駅まで送って行きます。

レイコさんは言います。

「私のこと忘れないでね」、

「あなたと会うことは二度とないかもしれないけれど、

私どこに行ってもあなたと直子のこといつまでも覚えてるわよ」、

トオルがレイコさんの顔を見たら、彼女は泣いていた。

最後にレイコさんはトオルに「幸せにな리なさい」、

「私、あなたに忠告できることは全部忠告しちゃったから、これ以上もう何も言えないのよ。

幸せになリなさいとか。

私のぶんと直子のぶんをあわせたくらい幸せになリなさい、としかね」

〓 〓 〓

このレイコさんとお別れのセックスに次のような非難もあります。

一回こっきりのお別れの挨拶のようです。

お別れの挨拶なんかで肉体関係を結んでほしくはないのです。

それにしてもこの小説は男女関係がとても乱れていますね。

そこところが私にはよく理解できません。

著者の私生活もこんななのでしょううか？

〓 〓 〓

僕の好きな映画「愛しのローズマリー」でも

ジャック・ブラックがお別れにお情けのセックスをすると言います。

これはアメリカ人でも、あるんだと思いました。

お別れに握手でなくてセックスして別れたいくなる。

お互いにそう思う。

あの時代だったからだろうか？

一番の思い出になるのは握手でもキスでもない、

最高の男女の思い出はセックスになることもあるんでしょう。

## 恋は盲目にさせる物質

僕が恋愛映画からまず学んだのは、

恋愛には必ず終わりがあるということです。

永遠はありえないということ、必ず別れが訪れる。

急な死別もあるし、老いてどちらかが先に逝きますね。

その時にどういう行動をするかですね。

さあ、話しをはじめましょう。

まずは、恋は盲目にするドーパミンという脳内物質のこと。

テレビで取り上げられたので、ご存知の方は、申し訳ありません。

研究が進み、恋は盲目状態にするのは、

快楽を司るドーパミンという脳内物質の大量分泌だそうです。

ドーパミンは相手の悪い面や嫌な面を見ないようにするそうです。

だから周囲や両親が反対しても無駄なんですね。

理性でなくてドーパミンが支配しているからです。

しかし高い代謝を要求するドーパミンの大量分泌は

身体への負担が大きくて長くは続かないそうです。

そのため、“恋愛（恋は盲目）の賞味期間”はせいぜい3年ほど。

平均で18ヶ月まで、長くて3年。

これは芸能人の別れる時期に合致していますね。

でもたまに異常障害で3日なんていう人もいるでしょう。

なぜ長くて3年かというと、

お産までは男がよりそって、食料を持ってこさせるためのようです。

お産が済んだら、もう男は自由。

このような仕組みになっているので、

恋愛に入る前にお互いの相性をしっかりと確かめることが大切。

燃え上がるのはドーパミンと子孫繁栄のシステムのせいなんです。

ドーパミンがなくなった後は人の相性だけが二人の絆になると思います。

相性と永遠に直らないDV（家庭内暴力）という性格かどうかを

みきわめる必要がありますね。

## 恋愛の勝ち逃げ（愛去り）

好きなのに去っていく……

夫に飽きられてフられる前の幸せなうちに……

男に去られる前に生甲斐を見つけて……

ゲームで言うとなけないうちにさっさと勝ち逃げしてゆく……

勝ち逃げというのは例えが妥当ではないかもしれませんが

僕には同じようにも思える。

そんな恋愛映画をいくつかあげましょう。

ルコント監督の「髪結いの亭主」（1990）「と東陽一（ヒガシヨウイチ）監督の

「化身」（1986）「と「湾岸道路」（1984）」。

「髪結いの亭主」（1990）「

ルコント監督は男目線で男女のシリアスな葛藤をえがくのが上手だ  
と思う。

「仕立て屋の恋」（1989）「でつけた衝撃は今もおさまらない。

さて本作は女性が勝ち逃げしてしまう、それも自殺。

アントワーヌは女の床屋さんと結婚したいと思っていて、その夢が叶ってしまう。

2人は一緒に暮し始める。

夢が叶ったアントワーヌは彼女以外何も要らなかった。

仕事も、友人も、子供さえも。

店には様々な客がやって来ては帰って行き、幸福で静かな日々が続く。

彼女マチルドはほとんど無口で、アントワーヌを深く愛しいつも静かに微笑んでいた。

しかし、ある雷雨の日、客のいない店の中でSをした後、

マチルドは「買い物に行く」と言って雨の中に飛び出していく。

次に出会った時、マチルドは川から引き上げられ息をひきとっていた。

彼女は水の中に身を投げてしまった。

「あなたが心変わりして不幸になる前に死にます」という手紙を残して。

夫に飽きられてフられる前の幸せなうちに死ぬ決意をした。

つまりSしか求めない夫が、自分（妻）が年をとったら、

見向きもしなくなると直感したからで、

精神的な愛情をふんだんに与えていないとこんなことがあるかもです。

「めぐりあう時間たち（2002）」でバージニアウルフが入水自殺するのと似ているところもあり、

突然の自殺はサリンジャーの「バナナフィッシュ」にうってつけの日のようでもあります。

＝  
＝  
＝  
＝

次は東陽一（ヒガシヨウイチ）監督の二作。

彼は愛から去ってゆく（愛さり）をひとつのテーマにしているのかもしれない。

化身（1986）

男に去られる前に生甲斐を見つけて去っていく女。

原作は渡辺淳一の同名小説で、藤竜也、黒木瞳主演。

大胆な黒木さんと阿木燿子さんのヌードに堪能しました。

ある人が言っていました。

蕾から花へと育て上げたのに、あらら蝶に変身、飛んでいつてしまった。

霧子はまだ男を愛していたが、元力ノの史子と彼の関係を知り愛の不確かさを感じてしまう。

そして、男に去られる前に生甲斐を見つけて去って行ってしまう。

男目線の話で、女性を飼育できるところが笑ってしまいます。

「日曜はダメよ（１９６０）」も自分好みの女にしようとして失敗しますね。

恋愛は常に一期一会ですね。

＝ ＝ ＝

もうひとつは「湾岸道路（１９８４）」

原作は片岡義男の同名小説、主演草刈正雄、樋口可南子。

愛する妻を湾岸道路に置き去りにして去っていく話し。

この作品は思い入れがありますので、

以前にも書いていますが、次回に再稿させてください。

## 妻は夫のものか（湾岸道路）

映画「湾岸道路」

妻は夫のものなのか・・・

傷つけないうち去っていく・・・

この映画のDVDはありません、数年前テレビで放映されました。

かつこよく結婚して、かつこよく離婚したい男の話です。

男（健介）は言います。

「おまえのような姿のいい、ものすごい美人と、あつというまに結婚してしまうのも格好よかった。

離婚してひとりどこかへいってしまうのはもっと格好いいと。

俺は思いついたんだ」

健介の別れの言葉に妻芙美子もそれ以上追及しません、理由を尋ねないのです。

そんなこと今まで言われたことがない、

いつもフッてばかりいる美人だからでしょうか。

彼が去っていく理由は話しの中から知るしかありません。

去る理由は嫉妬ではないかと私は思います。

彼は妻を自分だけの所有物にするべきではない、自由な存在だと思っ  
っているようです。

## ○別れの発端

スポーツクラブで、ボディ・ビルのインストラクターをしている杉本健介は、結婚して二年。

妻・芙美子は、一部上場会社の総務部庶務課に勤めている。ある日、健介は芙美子を叱責した。

彼があこがれているハーレー・ダビッドソンのビッグ・バイクの頭金

を支払おうとした時、銀行口座の残高ゼロを知ったからだ。

健介「この野郎」

芙美子「どうしたの」

健介「ほんとなら、ぶん殴るところだ。

殴るのだけは、やめといてやるよ。

いくら馬鹿でも、おまえは仮にも女房だからな。

おやじがいつもおふくろをひっぱたくのを、

いやというほど見てきたから」

健介は70万貯めていた。

今回が初めてのことでない。

芙美子のクレジット・カードの枚数は31枚になっている。

しかし、二人の仲は険悪になったりはしなかった。

それで芙美子は夜働きに行くようになる。

クラブ「桂」のホステスのピンチヒッターとして

店に出た芙美子は、たちまち客達の注目を集めた。

そんな芙美子に「桂」のママは、彼女に金を払う客を紹介した。

それを告げられた健介は、「愛してやれ」と言う。

箱根のホテルで一晩15万円。

健介が芙美子をホテルまで送って行く。

健介は言います。

「愛して、ただでさせてやれ。

おまえは、女房にしておくよりも、

かねで買ったほうがいい女かもしれないな」

週2日、芙美子はクラブに勤めだし、

たまに箱根のホテルへ出かけてと、

銀行の残高を気にせず好きなものを

買い求めることができるようになった。

二人の生活は今までどおりだったが

健介の心の中に、空虚なものが広がっていく。

○妻は夫のものなのか

もし私が健介だったら、いや一般的な旦那だったら、

許せないと思う、寛容すぎる。

ジェラシーがメラメラと沸いてくるはずだ。

この嫉妬はよくないのか、嫉妬してはいけないのか、

私はまだ答えを出しかねています。

健介にとって妻とは束縛しないもの。

それは母が父からDVを受けていたトラウマかもしれない。

ある意味男のやせ我慢的な感じがします。

健介はこのままだと妻を責めて傷つけるかもしれない。  
かっこいいままに別れようと決意したようだ。  
せめても妻への腹いせに湾岸道路に置き去りにして、  
去っていいこうとした。

また突然去ることで妻を困らせてやろうと思ったかもしれない。  
男はだいたいがマザコンだから。

## ○別れの日

未明の4時

健介は芙美子をハーレーに乗せようとしている。

芙美子「離婚してどうするの？」

健介「ひとりで、さまようんだ」

芙美子「さまようって、なにをするの？」

健介「何度も言っただろう。なにもしない。さまようだけだ」

健介は芙美子をバイクに乗せる。

芙美子「健介さん、どこへ行くの」

健介「湾岸道路」

健介は湾岸道路の入り口に着くと道路に芙美子を下ろした。

芙美子「今日はどこまで？」

健介「わからない」

芙美子「気をつけて」

健介「別れ話起きてから一度も泣かなかった。

芙美子、君は素敵な女だ」

呆然と道路に立ちつくす芙美子。

健介「元気でいろよ」

あのハーレー独特の爆音を響かせて悠然と走り去っていった。

芙美子は湾岸道路にひとり置き去りにされたことが悔しくてたまならない。

そしてその後まったく便りもない健介・・・

芙美子は大型バイクの免許をとるために必死に努力する。

そしてついにハーレー仲間と湾岸道路の入り口に立つ時がきた。

ハーレー仲間「さて、これからどっちへ行くのかな？」

芙美子「わからないわ。とにかく、湾岸道路を走ってみる」

ハーレー仲間「そのあとは」

芙美子「さあ」

○原作は片岡義男の同名小説

片岡の小説はほとんどバイクの好きな男が出てきます。

話しはドロドロしてません、さらっとした恋愛がえがかれています。  
ラブのハードボイルド的ですね。

彼の小説では「彼のオートバイ、彼女の島」が一番気に入ってます。

映画作品なら「スローなプギにしてくれ」から入るといいでしょう。  
浅野温子のデヴィュー作で、

奔放な少女に振り回される男たちの弱さと優しさを描いています。

そして崇拜する藤田敏八監督の作品でもあります。

## 男は愛しすぎると父親になる（人のセックスを笑うな・サンセット大通り）

他の男に心がいつてもジェラシーもなく、  
ただ好きな女性の幸せを願う男  
やがて男は父親になってしまう。

「人のセックスを笑うな（2008）」のユリの夫・猪熊

山崎ナオコーラの同名小説の映画

ユリ（永作博美）、39歳、

産休の先生に代わりリトグラフの非常勤講師として  
学校にやって来るが、19歳の生徒みるめ（松山ケンイチ）を愛人  
にしてしまう。

43

ユリの夫・猪熊に扮したあがた森魚は  
気ままな妻ユリに振り回されながらも、  
ひたすら尽くす気の毒な夫で飄々としていて、  
ユリとはまた少々違ったタイプの自由人。  
信玄餅の食べ方を事細かに指南するシーンが、ゆるい笑いを誘う。  
この年長の夫が父親のように与える安心感。  
落ち着いているけれども遊び心もあって、  
全てを優しく包み込むような人。  
役柄なのか、それともあがた森魚の独自のもののなか、  
両方が、分らないけどとにかく良い。  
理想の夫であり父親のようです。

夫との生活を壊す気はないユリは、愛人関係が噂になると、

一途なみるめの前から姿を消し夫婦でインドに行ってしまう。

＝  
＝  
＝  
＝

二番目の男は

フランソワーズ・サガンの小説「熱い恋」を映画化した  
「別離」（1968）のポール。

カトリーヌ・ドヌーヴ主演。

このポールと言う名はサガンでよく登場する中年の男で二枚目です。

サガンの小説には美男しかでてきませんね。

彼女はファザーコンプレックスで、  
彼女自身決して美女ではないので、  
美男を求めるのでしょうか？

さて、そのポールが主張します。

ねえ、リュシル、あなたはわたしのところに帰ってきますよ。  
わたしはあなたのためにあなたを愛しているのです。

アントワーヌはあなたといっしょにいたために  
あなたを愛しているのです。

彼はあなたと幸福でいたいのです。  
彼の年ではもったもなことです。

だがわたしは、自分のことを離れて

あなたが幸福であることを望んでいるのです。

わたしは待つ以外にありません。

アントワーヌはあなたを非難するでしょう。

もうすでにあなたという人を、享楽主義で、のんきで、どちらかというと卑怯なあなたを非難していますよ。

アントワーヌは、彼のいわゆるあなたの弱点だとか欠点だとかを当然恨むようになるでしょう。

まだあの男には女の強さとなっているものがわかっていないのですよ。

男が女を愛する理由はそれなんです、

たとえそれが最悪のものを包み隠しているとしても、

アントワーヌはあなたからそれを学ぶでしょう。

あなたが陽気で、おもしろく、優しいということを学ぶでしょう。なぜならあなたはこれらの欠点をすべてもっているからです。

だがもうすでに遅いでしょうね。すくなくともわたしはそう思う。

そしてあなたはわたしのところに帰ってきますよ。

なぜなら、わたしがそういうあなたの欠点を

皆知っているということをあなたは知っていますからね。

||||||

次は

映画「サンセット大通り（1950）」でのマックス。

大監督ビリー・ワイルダーの作品で、

「アパートの鍵貸します」「情婦」「お熱いのがお好き」などは映画ファン必見です。

さて話しはサイレント映画の大女優ノーマ・デスモンド（グロリア・スワンソン）が、  
かつての監督であり、  
最初の夫だったマックス・フォン・マイアリンク（エリッヒ・フォン・シュトロハイム）  
を執事として、過去の夢に生きていた。

老いた彼女には仕事は途絶えているが、  
彼女は完全に妄想のとりこになっていて、  
今も現役の大女優だと思い込んでいる。

マックスは彼女のエゴを満たしそのプライドを守り続けようとする。

彼は偽って大量のファンレターを書き続けたりするし、  
彼女のために脚本家兼愛人ジョー（ウィリアムホールデン）を雇ったりする。

しかしジョーが他の若い女性と親しくなると彼女は嫉妬して殺してしまう。

殺人事件が起きた屋敷に群がるマスコミと映画関係者。  
カメラのスポットライトがノーマに当たると、  
既に頭がイカれて妄想狂となっていたノーマは、  
それが女優復活への賞賛の嵐と思い込む。

「復帰の第一幕は、階段から下りる場面よ」  
恍惚な表情を浮かべて降り始めるノーマ。  
その姿を目に涙を溜めて撮影して紹介するマックス。

## たった3語の相づちで女性がくどかれた

どうしたらもてるか？

私は失恋ばかりでえらそうなことは言えませんが、

映画俳優をみていると

世界で一番の美女たちにもてたのはゲーリー・クーパーのようです。

あの誠実で堅物の二枚目にみえるゲーリー・クーパーです。

その彼が絶世の美女で大女優のグレース・ケリー、  
イングリッド・バーグマンを口説いてしまったそうだ。

まあグレース・ケリーとは「真昼の決闘（1952）」で共演、  
イングリッド・バーグマンとは「誰が為に鐘は鳴る（1943）」  
で、

それぞれ職場恋愛になったのでしょう。  
しかしそれだけではないと思います。

彼のもてる秘訣は徹底的な聞き役になることだったようです。

有名な話ですが、たった3語の相づちで女性はくどかれた。

「まさか」「ほんとかい」「そんな話、初めて聞くよ」。  
クーパーはそう相づちを打って、

女性の話に耳を傾けて女性が落ちていった。

女性と会話するには、3語で十分。

いまやハリウッドのモテ男、

ジョージ・クルーニーも似たようなことを言っています。

2人はイケメンでもあるが、何より聞き上手なのですね。

人気のあるホストも同じようです。

明石家さんまはおしゃべりですが、

「ほんまかいな」と驚いてみせるのがうまい。  
意外と聞き上手ですね。

そして男性は勘違いしないこと。

とにかく男性は粘り強く黙って女性の話を聞くことです。

その話しでの解決策の提案はしてはいけない。

どうしても男はいい解決策を提案したくなるものだ。

するとその会話から口論に発展することがある。

つまり男性が女性を見下してしまうようになることがある。

批判↓防御↓批判↓防御↓見くだし・・・

これが続くと相手を見下し始め延々続く喧嘩へと発展する。

これが夫婦でのケースならいつのまにか離婚にまでつながってしま  
う。

夫婦仲が心配な旦那さんは、

まず奥様に「君の将来の夢は なんだ？」と質問してあげる。

そして「ウンウン」と聞き、  
でも時には演技で「そうなんだ」とアクセントを入れる。

奥様の毒素を抜いてあげるだけでいいのです。  
これは旦那様にも効果があるかもしれません。  
毎日愚痴を言わずに黙って

旦那様の話を聞ける女性は利口な方ですね。

とにかく経験から、女性は男性に言う言葉で多いのは、  
「本当に聞いていたの？」

とにかく男っていうやつは

女性の言うことをちゃんと聞かないように思えます。

作家の塩野七生氏は、著書「人びとのかたち」の中で  
クーパーのエピソードに触れ、こんなことを書いている。

自信のある女性、気の強い女性、

自分は仕事ができると思っている女性に対して、

話を聴いてくれるということくらい有効な武器もないからだ。

なにしろこの種の女性たちは、自分の話すことはそれ自体で価値ある、

と思いこんでいるからである。

性人類学者のキム・ミヨンガン氏も言っている。

人気のエステティシャンは施術がうまいからだけではない。

「大変ですね」と相づちを打ち、

愚痴を吐き出させるのがうまいのです。

お客の大半がガムシヤラに働き、

弱みを見せたがらないキャリア女性が多くエステに通うらしい。

この聞き上手は女性だけでなく男性にも、

そして仕事でも通じる話ではないでしょうか。

余談だが<1万人斬り>したハリウッドスターがいたそうだ。  
不倫スキャンダルに揺れるプロゴルファーのタイガー・ウッズは  
続々と愛人が発覚し、

安室奈美恵との交際が発覚した「ロンドンブーツ1号2号」の田村  
淳は

<400人斬り>とも言われるが、上には上がいた。

往年のハリウッドスター、ウォーレン・ベイティ（ビーティ）が  
伝記「スター　いかにウォーレン・ベイティはアメリカを誘惑した  
か」

の中で<1万人斬り>を告白している。

## 永遠で基本の恋愛映画「カサブランカ」

<恋愛映画を話そうよ>で

映画「カサブランカ（1943）」を話さないのは変ですね。

恋愛映画の古典、基本、教科書ですから。

いろいろと横道にそれると思いますが  
ご勘弁下さい。

### 歴史的なセリフの宝庫

映画「ホリデイ（2006）」で、

昔の脚本家イーライ・ウォラック（アーサー）が

「カサブランカ」の脚本を手伝い、<君の瞳に乾杯>という  
有名なセリフを考えたのは私だ、と言う。

アーサーの言ったことが本当かどうか分からないが、  
とにかく数多くの関係者が関わった作品であることは事実です。

「カサブランカ」という映画は

アメリカ人にとって国宝級の映画。

いろんな人に影響を与え人類の遺産のような映画だ。

（汀一弘氏）

この映画の画面が白黒なので、

それだけでアレルギーを起こす方もいるかもしれません。

でも、本作に登場する人物名、セリフは

その後の映画小説その他で永遠に語りつがれている。  
村上春樹氏の作品ですらでてきます。  
そんな恋愛映画のバイブルなんですね。

そして歴史的名セリフの宝庫。

故淀川さんはく男と女のしゃれた会話の洪水>と称していました。

「歴代の映画脚本ベスト101」で1位

2006年アメリカ脚本家組合が選んだ

脚本家組合のメンバーが、映画1400本以上の映画を選出し、  
その中から更にメンバーが投票して決定した101本ですが  
1位は「カサブランカ」です。

「歴代のアメリカ映画のベスト100」で3位

2007年に米映画協会（AFI）に所属する

監督、脚本家、俳優、編集者、批評家ら1500人が

歴代のアメリカ映画のベスト100を選出&発表すると  
以下の順位です。（10年単位で選出）

いわゆる永遠なる映画ですね。

1・市民ケーン（ずっと1位） 映像の古典・教科書

2・ゴッドファーザー（前回3位）父親のバイブル

3・カサブランカ（前回2位） 恋愛映画の古典・教科書

アカデミー賞と脚本家の神様

第16回アカデミー作品賞を、

監督のマイケル・カーティスは監督賞を受賞。

脚本のジュリアス・J・エプスタイン、フィリップ・G・エプスタイン、

ハワード・コッチの三名が脚色賞を受賞した。

このエプスタイン兄弟はハリウッドでは脚本家の神様とされているようです。

この兄弟を神と崇めている脚本家がありました。それはチャーリー・カウフマンで、

彼の作品は「マルコヴィッチの穴（1999）」や

「エターナル・サンシャイン（2004）」

など奇想天外ですね。

彼の作品の「アダプテーション（2002）」で脚本家育成講座のシーンがある。

そこで登場するマッキー先生（カウフマンの理想形？）が常に「俺の2時間半をドブに捨てるのか」と怒りだして言う。

1・良い脚本とは？

「映画はラストがよければ全てよし、ラストで決める！」

ただし、それを成立させるためのキャラクターを突然登場させることはタブーである。

2・神と崇める脚本家は？

「傑作中の傑作「カサブランカ」を書いたエプスタイン兄弟」

3. 淡々と何も起こらないドラマ、  
現実のようにドラマのない脚本はどうですか？

講師は激怒して答える。

「現実がドラマティックではないという認識は誤りだ、  
世界のどこかで毎日人が人を殺してるし、  
現実には衝撃的な出来事であふれている。  
何も起こらない映画なんて誰が見たいんだ」

## ボギーはメソメソと泣く男「カサブランカ」

男優ナンバーワンのボギーことハンフリー・ボガード  
1999年にアメリカ映画協会（AFI）が発表した  
「アメリカ映画スターベスト100」では  
男優の1位に輝いている。

みなさん ボギー、ボギーとよく聞きますか？  
ゴルフでなくて、ボギーとは  
ハンフリー・ボガードの愛称ですね。

映画「カサブランカ」のボギーにほれてしまった男がいる。  
それはウッディ・アレン。

映画「ボギー！ 俺も男だ」（1973年）

ウッディ・アレンの舞台戯曲を彼自らの脚本・主演で映画化。  
ボガードへのオマージュに満ちたコメディ映画。  
原題「Play It Again, Sam」（「カサブラン  
カ」での名セリフ）。

映画はハンフリー・ボガードにとりつかれている  
映画批評家のアレン（ウッディ・アレン）が、  
この日も名作「カサブランカ」を  
心ゆくまで楽しんでいるところからはじめる。

そして有名な作詞家阿久悠も  
「カサブランカダンディー」を書いて、  
沢田研二が歌っている

「ボギー ボギー あんたの時代は良かった♪」

またジブリ作品にもボギーが豚になって出てくる。そう、「紅の豚」。

ボギーのイメージは

やせ我慢、渋い、反骨そして淡黄色トレンチ・コート。

ウッディ・アレンの脚本に

でてくるボギーは女性を冷たく突き放す男。

阿久悠の歌詞では

ピカピカの気障で、ききわけのない女の頬を、  
一つ二つはりたおしてしまう男。

「紅の豚」では

ボギーそっくりのトレンチコートを着て、もう二度と恋はしない男。

私のボギーイメージは「紅の豚」に似ていますが、  
女性に冷たいわけではないと思っています。

映画「カサブランカ」を観るとわかりますが、  
ボギーはメソメソした男で、

裏切られた女性を思い出すと泣いてしまう。

だから彼女の思い出となるものは一切排除する。

ボギーの経営する店でピアニスト・サムには

彼女との思い出の曲は絶対弾かせない。

「カサブランカ」でボギーは二度も女性で泣いてしまっんです。

一度目は

有名なセリフでもあり、

恋愛におけるくよりによつて>というものですね。

そのシーンはちょっと前にテレビコマーシャルでも流れました。

<世界に星の数ほど店はあるのに彼女はおれの店にきた>

"Of all the gins joints in all the towns in all the world, she walks into mine."。

説明しますと

裏切られた女性がボギーの店に来て再会してしまっんです。  
もうその夜は眠れない。

「ニューヨークは今 何時だ」  
とボギーはサムに聞く。

そしてサムに帰れとボギーは言うが

サムも眠れないのでいっしょにいますと言う。

サムもその女性に関わっていてボギーのことが心配なんです。

そして泣くシーンが始まる。

バーボンを片手にボギーは言う。

「世界中に星の数ほど酒場はあるというのに、なぜ俺の店に来たんだ」

サム「もう帰りましょう」

ボギー「いや お前は帰れ」

X X X

ボギー「彼女が来るんだ」

（今夜彼女が会いに来る予感がするのだ）

「あの歌を弾いてくれ サム」

サム「あれは・・・」

（この歌はボギーと彼女の思い出の歌）

ボギー「彼女には、弾いたではないか」

サムはピアノを弾きながら

「♪時の過ぎ行くままに♪」を歌いだす。

You must remember this

おぼ

えておいて

A kiss is still a kiss

キスはキス

A sigh is just a sigh

ためいきはためいき

The fundamental things apply

もともとそれだけのこと

As time goes by.

時が

すぎても

するとボギーが泣きはじめる。  
そして大きなためいきをつく。

二度目は

ドイツ軍が迫ってきたパリを二人で脱出するために  
待ち合わせした駅でサムが彼女の手紙をもってくる。

「いっしょに 行けません 理由は聞かないで・・・」

雨が降ってきてトレンチコートと

その手紙の文字が 雨で、にじんでゆき、  
ボギーは雨にまじって涙する。

その他ボギーのオマージュ作品。

「ハリウッドに別れを」(1975)

アンドリユー・バーグマン作の探偵小説。

1950年代のハリウッドが舞台になっており、

ボガートが主人公の私立探偵を助ける役回りで登場する。

「名探偵再登場」(1978)

ニール・サイモン脚本

全編『マルタの鷹』と『カサブランカ』のパロディ。

「ボギーと呼ばれた男」(1996)

原題「BOGART : HERE'S LOOKING AT  
YOU, KID」

テレビ「太陽にほえろ」世良公則演じるボギー刑事こと春日部一。

## 君の瞳に乾杯「カサブランカ」

ナンバーワン男優ボギーが言う

<君の瞳に乾杯>というセリフについて、  
私は以前から何度も述べているが  
今回あらたにいくつか加えてみました。

おそらく脚本家の間ではかなり有名なセリフだろう。

Here's looking at you, kid.  
又は Cheers! Looking at you, kid  
s.

直訳すると

「君を見つめることに乾杯、カワイコちゃん」

直訳されるとなんかピントこないが、

英語では素晴らしいセリフらしい。

米国映画協会（AFI）名セリフベスト100（2005）  
でも5位である。

映画「ホリデイ（2006）」でも、

昔の脚本家イーライ・ウオラック（アーサー）が

「カサブランカ」の脚本を手伝い、

この有名なセリフを考えたのは私だ、と言う。

英語での名言のニュアンスが伝わらない。

これが、なんで名セリフなのか？

まず絶世の美女イングリッドバーグマンに言うセリフだからだろう。

もう私はバーグマンを観ているだけでフリーズ（凍結）してしまう。

それでも私にはなぜこれが名セリフかわからない。

「君を見つめることに乾杯、カワイコちゃん」がなぜ？

しかしこの英語のニュアンスを

日本人にも納得する訳をした人がいたんですね。

もう有名な話ですが、

字幕の魔術師、高瀬鎮夫（たかせ しずお、1915年 - 1982年）氏

なんとこのセリフに瞳をつけてしまった、「君の瞳に乾杯」。

なんと素晴らしい名訳、

これは字幕史に残る名訳と言われている。

高瀬さんのことを少々話させてください。

彼の作る字幕は名訳というか、

もう訳を逸脱したセリフですね。

「ジョルスン物語（1946）」の決め台詞

「You ain't heard nothin' yet!」

直訳すると「あなたはまだ何も聞いていない」

これを高瀬氏は「お楽しみはこれからだ」とした。

「第三の男」（1949）の

“I shouldn't drink it. It makes me acid.”。

直訳「私はこれ（酒）を飲んではいけない。

酒は私を a c i d（酸性と不機嫌を掛け合わせた意味）にするからだ」

これを高瀬氏は「今夜の酒は荒れそうだ」。

「ある愛の詩（1970）」

アリ・マッグローが学友の書いたこの小説を  
プロデューサーのロバート・エヴァンズ

に売り込みに彼の邸宅（花の御殿と言われた）を訪れ、  
もう帰らないで結婚してしまったというエピソードがあり、  
二人で考えた傑作だと言っているセリフ

“ Love means never having to say  
you're sorry”。

直訳だと

「愛というのは、ごめんなさい、残念だと決して言わないことである」

「愛とは、ごめんと言わなければいけないことではない」

これを高瀬氏は「愛とは決して後悔しないこと」と字幕した。

なんという才能だろう、脱帽である。

さてく君の瞳に乾杯>に戻ろう。

昔NHKの放送で

この台詞が「君の命に乾杯」と訳された時、  
抗議が殺到してしまったそうだ。

このセリフく君の瞳に乾杯>は誰が作ったのだろう？  
どうも不明のようです。

「カサブランカ」には7名以上の脚本家が関わっているそうだ。この年代は誰もが参加できる自由な雰囲気があったので、名作がさらに磨きがかかったのかもしれない。

映画脚本の土台となったのは

マーレイ・バーネットとジュリアン・アリソンの1940年戯曲「誰もがリックの店にやってくる」で、

これが1941年ワーナーのアイリーン・リーによって2万ドルで買われた。

この原稿はハリウッドで再検討され発展させられ手を加えられたがその作業は七人もの映画脚本家の手で行われた。

中心となったのは

双子の脚本家チーム、ジュリアスとフィリップのエプスタイン兄弟で

気のきいた台詞は大半が彼らの発案だ。

それに物語の政治的意味を強調したハワード・コッチ。

おそらく君の瞳に乾杯>は

脚本の神様と言われたエプスタイン兄弟のセリフだろう。

もしかしてそれに誰かが付け足した可能性もある。

この前「ヤンキー・ドゥードゥル・ダンディー（1942）」を観た。

粋なセリフがいくつかある。

“ My mother thanks you . My father thanks you .

My sister thanks you . And I thank you . ”。

「母、父、妹、そして私がお礼を」

「君が歌う為に作った歌だが、フェイにやるしかなかったんだ」  
「いいのよ、フェイは歌を、私は作者をとったから」

その他うなるようなセリフがある。

DVD特典で解説者が言うことには、

この映画の脚本に名前が挙がっていないが、

一部のセリフは

「カサブランカ」のエプスタイン兄弟が関わっているという。  
それなら納得と私は思った。

米国映画協会（AFI）名セリフベスト100（2005）で、  
「カサブランカ」からセリフが6つも入っている。  
それで1位が気になるでしょう。

1位は“Frankly my dear, I don't  
give a damn.”

「はつきり言うが、俺の知ったことじゃない」。

「風と共に去りぬ（1939）」からのセリフで  
スカーレットが最後の最後に自分はレット・バトラーを愛していた  
のだと

いうことに気づき感情を吐露したが、もう既に遅い。

もういいかげんうんざりしたバトラーが言い放つ最後のセリフ。

古いですが

「木枯らし紋次郎」の決めセリフと似ていますね。

「あつしにはかかわりのねえこッて」

## 「カサブランカ」は男女の洒落たセリフの洪水

故淀川長治さんは映画「カサブランカ」を  
男と女のしゃれた会話の洪水と  
彼の著作で書いている。

1942年と古い映画ですね。

1930年頃から、それまでの無声映画が  
トーキーになり、俳優がセリフを話すようになった。

それから約10年も経過すると、  
歴史的に有名なセリフを持つ「カサブランカ」が登場して  
後世の脚本家に絶大な影響を与えますね。

アメリカ映画協会（AFI）

名セリフベスト100（2005年）の中で

「カサブランカ」から以下のセリフがランクインしています。

第5位：“Here’s looking at you, kid.” 「君の瞳に乾杯」

第20位：“Louis, I think this is the beginning of a beautiful friendship.”

「ルイ、これが俺たちの美しい友情の始まりだな」

第28位：“Play it, Sam. Play, As Time Goes By.”

「あれを弾いて、サム。『時の過ぎ行くままに』」

第32位：“Round up the usual suspects.” 「犯人を捜せ」

第43位：“We'll always have Paris.”

「君と幸せだったパリの思い出がある。又は俺たちにはパリの思い出があるじゃないか」

第67位：“Of all the gin joints in all the towns in all the world, she walks into mine.”

「世界中に星の数ほど酒場はあるというのに、なぜ俺の店に来たんだ」

そのセリフだけ聞いて

「カサブランカ」を観たことがない人は何だかわからない。

これらのセリフが後世の映画でいきなり引用されても、知っている人はニヤニヤするだけでそんなマニアな世界のことかもしれません。

これらのセリフはもうあまりに有名すぎていろんな本で解説されていますし、私も「カサブランカ」についてはホームペで長文でまとめています。

それでこの中からふたつだけとりあげて、あとはリンク外で好きなセリフをあげます。

32位の

犯人を捜せ。

Round up the usual suspects .

これだけだと なんだ?と思うでしょうが

これは映画の最後の決めセリフのひとつ、オチっていうやつ。

ボギーは逮捕されるのを覚悟していたが

署長がボギーをかばって「犯人を捜せ」と部下に命じる。

ユー・ジュアル・サスペクツ The Usual Suspects  
s (1995) という

傑作映画を知ってますか?

この映画は「カサブランカ」へのオマージュで

本作品のタイトルはおろか

製作プロダクションの名前まで及びます。

43位の

君と幸せだったパリの思い出がある。

俺たちにはパリの思い出があるじゃないか。

We'll always have Paris .

ボギー 「もし飛行機が飛び立って彼がいないと絶対後悔するんだ」

バーグマン 「いやよ」

ボギー 「今日もいい、明日もいい

でもすぐに君は一生後悔する」

バーグマン 「私達はどうなるの?」

ボギー 「俺たちにはパリの思い出があるじゃないか。  
昨夜取り戻したよ」

バーグマン 「でも離れないと昨夜約束したわ」

ボギー 「心はひとつさ。

さあ行くんだ。

君の瞳に乾杯」

バーグマン 「こんなに愛さなければよかった」

これはボギーのやせ我慢と言われていますが、  
私は別れた方がよいと思った。

もうひとりだと、恋に悩む必要はないから。

このボギーのセリフは  
好きな人と別れてつらくなった時に  
いつも勇気づけてくれます。

「ハリーポッター」でも  
同じようなニュアンスのセリフがあってじーんとききました。

「僕と関わるとみんな死んでゆく、  
僕はもうひとりでいる方がいいんだ」

「カサブランカ」で、  
このパリの思い出に似たセリフがありますので  
紹介します。

ボギーの店で再会して二人は口論しますが、その翌日。

ボギー「昨日はすまなかった。今は気持ちの整理がついた。  
来なかった理由をおしえてくれ。  
切符を一枚無駄にしたんだ。  
俺には聞く権利がある」

バーグマン「あなたは変わってしまった。

パリの頃のあなたなら理解してもらえたわ。  
今は、憎しみのかたまり

このまま別れた方がパリの思い出が残るわ」

|||||

ランク外で好きなセリフ

1・ボギーがいろいろとバーグマンへ質問攻めにする。

「質問を 全部終わらせる答えは 一つね」

と言ってバーグマンがいきなりキスをする。

2・最高のキス注文

「キスして

忘れないようなキスを

これが最後だと思っようなキスを」

3・ボギーが女性をつる有名なセリフと

それに似たセリフ

女性「タベはどこにいたの？」

ボギー「そんな昔のことは覚えていないね」

女性「今夜、会ってくれる？」

ボギー「そんなに先のことはわからない」

〓  
〓

ボギー「10年前は何をしていた？」

バーグマン「ずいぶん昔ね。

歯に矯正具をつけていたわ」

ボギー「マルセイユに着いたら結婚しよう」

バーグマン「そんな、ずいぶん先のことね」

## フェリーニの恋愛映画で必見の二作（道・カピリアの夜）

フェリーニ監督の作品

を観たことがない人が多いですよ。

いきなり彼の後期の作品を観ると

理解しがたい監督像になり、

もうそれで観なくなるかもしれません。

フェデリコ・フェリーニ

「トスカーナの休日」で彼のことを「フェフェ」と呼んでいた。

イタリアの映画監督

「道」「カピリアの夜」「8 1/2」「フェリーニのアマルコルド」で

4度のアカデミー賞外国語映画賞、

1992年にはアカデミー賞名誉賞を受賞

20世紀の映画監督として十指に必ず入る巨匠。

重層的で夢幻の広がりを与える手法を駆使した作品群

世界の映画製作関係者から「魔術師」の異名で呼ばれる。

「8 1/2」という作品の良さは自分にはわからない、  
最近「NINE」でリメイクされましたね。

「甘い生活」もしかりです。

フェリーニ二作品で好きなのは以下の2作

彼がえがく捨てられる女、「道」と「カビリアの夜」

この2作がなければ私にはただの監督。  
彼のほかの作品は私にはピントこない、  
ちょっと良いと思うのは映像美だけである。

映像美では「悪魔の首飾り」と「フェリーニのローマ」が印象的で、

バイク団が夜のローマをライトアップして疾走するのは圧巻。

彼は夜をえがくことにこだわっていると思う。

フェリーニ映画には巨乳巨尻の女性が多く出てくる。

猥雑な女たちの娼館や道化師。

フェリーニは

「女性はすべてだ、映画そのものが女性だ」  
と言っているそうだ。

フェリーニは10代の頃

商売として詐欺師を

やっていたようで、

「道」や「カビリアの夜」に

出てくる登場人物のような生活を送り、

女性を捨ててきた。

その罪を清めるために、

自分に救いを求める、

懺悔の意味で

この2つの作品をつくったのかもしれない。

フェリーニにとって

純粹無垢な魂

永遠に女性的なるものは何か

彼は映画でみせつけている。

自分は思う

永遠に女性的なるものは何か  
母ではないか？

そして

白痴、知恵遅れの女性、

盲目女性は男性が無視できない存在では？

○「道」

監督自身並びに他も認める  
一番の作品は「道」だと思う。

私はこの作品を最後まで観れないのです、  
途中で号泣してしまうんです。

<監督が主演女優に恋したら、その映画は名作となる>

「Shall we ダンス？」の監督周防正行さんは同作品の女  
優と結婚。

フェリーニ監督は

「道」に主演した女優ジュリエッタ・マシーナ  
と結婚して、とりあえず死ぬまで添い遂げた。

ヒッチコック監督は結婚しなかったが  
主演女優に恋していたはず。

名作かわからないがロジェ・ヴァディム監督は

ブリジッドバルドー、カトリーヌドヌーブ、ジェーンフォンダと出演させて、その3名と結婚している。

「道」 はアカデミー賞外国語映画賞

主人公のジェルソーミナは家が貧乏で

口べらしのために旅芸人ザンパーノに雇われる。

彼女は利口で、わざと馬鹿なふりをしていて、

男を立てる女性だ。

ジェルソーミナはザンパーノと旅に出る。

彼女は一生懸命に尽くす（もう泣けてきた）

内妻同然だが他の女と浮気しても文句も言わない。

そんな彼女に、

キ印は「どんな石ころでも役に立つ」と励ましてくれる

ある日、彼は彼女の慕うキ印を撲殺してしまう。

それを目撃したジェルソーミナはショックで気が変になる。

彼に抗議する、わめく 泣き出す。

それがわずらわしくて

彼は彼女を雪深い山道に置き去りにしてしまう。

もうおそらく死んだかもしれない。

いる時はわからないが、いなくなつて気づくものがある。

それは愛情。

男は女を愛していたことをはっきりと認識する。

でももう遅い、空気のような存在の女性なのだ。

あつてあたり前、ないと絶対後悔する。

ウッディアレンは熱狂的なフェリーニファンで

彼の傑作「アニーホール」で彼への賞賛ぶりがでてくる。

アレンは名前の通り、  
アレン児

過去の作品のアレンジが上手、  
彼の作品「ギター弾きの恋」は  
「道」のあらずじそのものである。

「カビリアの夜」くイタリア版「風と共に去りぬ」

これもアカデミー賞外国語映画賞

監督はジュリエッタ・マシーナ（奥様）で  
「カビリアの夜」という作品もつくった。

いきなり最初のシーンは男に殺されて、  
川に沈むが、そこから生きかえったところから始まる。

好きになつてはフラれる女がいる、名前はカビリア。

自分が尽くしたのだから後悔はしないのだろうか。  
落ち込むことはない。

そしてまた言い寄る男がでてきた。

いつのまにか男を好きになり、  
貧乏な男のために一生懸命に娼婦をやりながら、  
お金を稼ぐ。

「嫌われ松子の一生」と同じパターン。

お金がある程度大金になり、

男に渡すと、

男は彼女を暗い方へ連れてゆこうとする。そして自分を殺そうとすることに気づく。彼女は必死でその場を逃げる。

この男は巧妙な詐欺師なのだ。

観客もわからないように素朴な衣装で、まさにこんな男が詐欺師なのだろう。

純朴誠実という仮面をかぶるのがうまい。

「嫌われ松子の一生」の方は

男に貢ぐが、騙されたとわかると逆上して殺傷となる。

カビリアはまた男に騙されてしまったと、

なんとも言えない表情をして

もう一度人生をやりなおそうとする。

その夜のシーンは

「風と共に去りぬ」に似ている。

女性のおそろべき生命力。

この2作を観ると、

私も女性への懺悔の気持ちで一杯になる。

## すれ違いは恋愛映画の王様

「冬のソナタ」のような

男女のすれ違い物語は

ハラハラドキドキさせますね

何かサスペン斯的です。

人の思い、人の願いは

なかなかかなうことはない

お互いの思いが一致することもない。

思い通りにはならない。

電話は欲しい時は

かかってこないし

かかって欲しくない時にかかってくる。

恋をしたい時には相手はいない

相手がでくると

必ず複数の相手がでてきて

選択となってしまう。

「よりによって、なぜ」も

同じすれ違いに入りそうですね。

映画「カサブランカ」での

「よりによって、なぜ」は

あまりにも有名なセリフです。

「世界に酒場は星の数ほどあるのに

よりによつてなんでオレの酒場に来るんだ」

パリで恋した女性に  
裏切られたボギーは  
モロッコのカサブランカで  
お店を開いていたが  
そこへ彼女がよりによつて  
やってきてしまう。

映画じゃないが  
好きなユーミンの歌にもありますね。

どこに行くにも  
いつか彼と会うことを想定して  
着飾っていたのに。  
再会した日に限って  
安いサンダルを履いてた。

そして  
ユーミンは「魔法の鏡」が欲しいと願う。  
この歌は自分のマイベストです。

「魔法の鏡を持つてたら  
あなたのくらし映してみたい。  
もしもブルーにしていたなら  
偶然そうに電話をするわ」

すれ違いは  
映画「風と共に去りぬ」にもありますね。

相手がひたすら愛してくれるときには、その愛に気がつかず。

クラーク・ゲブルが去ろうとする時に彼女は彼の愛の大きさに、

初めて気がつくが、もう遅い。

アメリカ映画の台詞ベスト1に輝く

「もう俺の知ったことじゃない」と

彼は言い放って

風と共に去っていった。

男性からすると

最も敬遠したいタイプの女性ですね。

すれ違いの古典の名作としては

「ロミオとジュリエット」がありますね。

これはすれ違いを超えて

勘違いが起こす悲劇ですね。

日本の恋愛映画の古典にも

運命のイタズラのような

すれ違いで大ヒットしたものがありません。

昔は自宅にお風呂がない。

その頃の銭湯をガラガラにしたという

怪物番組「君の名は」はすれ違い作品ですね。

「忘却とは忘れ去ることなり。

忘れ得ずして忘却を誓う心の悲しさよ」

映画化されて

出演していた佐田啓二（中井貴一の実父）は上原謙（加山雄三の実父）と共に

これほどの美男はみたことがないです。

あらすじはハリウッド映画で、

私が好きなの「めぐり逢い」に似ている。

東京大空襲の夜に焼夷弾が降り注ぐ中、

たまたま一緒になった見知らぬ男女、

真知子と春樹は戦火の中を逃げ惑ううちに、

銀座の数寄屋橋までたどり着く。

一夜が明けて二人に恋がめばえて、

半年後の二十四日の夜、この橋の上で再会しようと約束した。

春樹は別れ際「君の名は」と聞いたが、

真知子は名を言わず立去った。

しかし約束の日に真知子は遂に現われなかった。

お互いに生きていたら半年後、

それがだめならまた半年後にこの橋で会おうと約束していた。

お互いに数寄屋橋で相手を待つも再会がかなわず、

やっと会えた頃には真知子はすでに人妻となっていた。

この運命がイタズラのすれ違いは恋愛映画の王様ですね。

## すれ違いの元祖「めぐり逢い」(前書き)

筆者は映画「めぐり逢い」について  
ブログで写真つきで掲載しています。

<http://77hikoboshi.blog111.fc2.com/blog-entry-2.html>

## すれ違いの元祖「めぐり逢い」

仮想「ノルウェイの森」

僕はミドリと暮らしていた。

部屋で「めぐり逢い」のDVDを観た。

涙が津波のようにあふれ出てきた。

ミドリが部屋に入ってきて言った。

「そんなに泣ける映画？」

「『めぐり逢い』だよ」

「タイトルは有名だけど観たことない。

古い映画よね。

メグライアンの『めぐり逢えたら』を観たら、

奥さんが『めぐり逢い』のシーンを語って、

大泣きしていた。

あれはなんなの？

他にも多数『めぐり逢い』のシーンがでてきて、

アメリカで人気があった作品だったことが理解できた」

「『めぐり逢えたら』は

『めぐり逢い』のオマージュ映画で、

他にもオマージュ作品がある。

『めぐり逢い』は公開当時、大勢の女性が泣いた。  
他のオマーージュ映画でも『めぐり逢い』で  
観客が泣いているシーンがある。

女性泣かせの映画だが、僕も最後のシーンは大泣きしてしまう」

「私が観ても泣ける？」

「悲恋じゃなくてハッピーエンドだけど  
ミドリは泣かないだろう。

イライラするかもしれない。

作品は恋愛映画の古典だし、

すれ違いの元祖、完全なメロドラマだ。

監督脚本は泣かせ上手のレオ・マツケリーだ」

「レオ・マツケリーって」

ミドリはパソコンに入力してネットで検索した。

「聞ってる？」

「邂逅」とパソコンの画面に出てきた。

「聞いているわよ、しかし難しい漢字がでてきた」

僕はパソコンの画面をのぞいた。

「それで『めぐりあい』と読むんだ」

「邂逅<sup>めぐりあい</sup>」

出演シャルル・ボワイエ、アイリーン・ダン、

1939年作品。

古い」とミドリは言った。

「確かに古い。ヨドナガ（淀川長治）さんが選んだ名画100選に入る。

ヨドナガさんの作品評価は

メロドラマではなくて非常に上品な美しい作品。

レオ・マツケリーは『我が道を往く』とか

『東京物語』の原点となる『明日は来らず』など  
奥ゆかしさと謙譲さで泣かせる監督だ。

レオ・マツケリーにとって思い入れの深い作品なんだろう。

18年後にケリー・グラント、デボラカーで

『めぐり逢い』をリメイクしている。

作品的にはそれが一番の、おススメだ」

「母も泣いたって言うていたわ」

と思い出したようにミドリが言った。

「1957年のリメイクの方が同じ監督なので

ラブコメ要素を入れてカラーだし、まとまった作品になっている。  
それにケリー・グラント、デボラカーの息が合っている」

「めぐり逢いのタイトルのつく映画は多いよね」

「1994年にまたリメイクされた。

グレン・ゴードン・キャロン監督の『めぐり逢い』

ウォーレン・ビーティとアネット・ベニングだけど。

ピントこなかった。

これを最初に観ない方がいい。

あとで比較するのはいいけど」

「なぜ泣けるの？」

「あれは主人公テリーの女の意地だね。健気だとも言える。」

パブロフの法則になってしまった。

最後のシーンになると自動的に泣いてしまう」

ミドリは黙って聞いていた。

「二人は船でめぐり逢うが、お互いに婚約者がいた。それで半年後に、天国に近い場所エンパイアステートビルで会う約束をするんだ。」

約束の日に彼女は、こなかった。

こんな時に携帯電話があればいいのだが。

男はフラレタと思った。

失意のうちにアメリカを去ろうとする」

「彼女を探そうとしないの？」

「あきらめが、はやいだろう。僕みたいだ」

「でもなんで、彼女は行けなかったんだっけ？」

「それはちょっと待って、最後に話すから。」

彼は画家で、彼女の絵を描いた。

アメリカを去ろうとする頃、偶然に劇場で彼女と再会してしまう。

お互いに異性の友人がいつしよだった。  
彼女は椅子に座ったままで、彼にハローと言っただけだった」

「『めぐり逢えたら』でも、  
この場面、女性が泣き出していた」

「有名なハローとしか言えないシーンだ。  
彼は悩んだ。

もう忘れようとしていたのに。  
アメリカを去る日に、彼女に逢いに行つた。  
どうしても、彼女がこなかったか理由が知りたかった」

「それはわかる」

「彼女の家に訪問するところから  
最後のシーンが始まる。  
そこからの二人の会話は、  
ほとんど覚えている」

「またウルウルしてきたね」

「だからパブロフの法則なんだよ。  
『めぐり逢えたら』の奥さんと同じさ」

「それでどうなるの？」

「男は間接的に聞こうとする。  
しかし彼女は行けなかった理由を  
聞かないでと拒否するんだ。  
その間、彼女はずっとソファァーに横になって、

足は毛布で隠している」

「へんね、ずっとソファーに横になって話しているの？」

「彼女の態度に不思議に思うが、追及しない。

彼も強引な性格じゃないんだ。

それで、あきらめて帰ろうとする。

その時彼女は目で訴えているんだよ。

行かないでとね。

行けなかった理由は言えないけど、

あなたのことを愛している。

わかってほしいとね。

でも彼にはわからず、去ろうとドアに近づいた時に、  
思い出したように言う。

『君の絵を描いた。』

だが僕には必要ないので、

その絵を絶賛した若い女性がいると

画商が言うので無料で、その女性に進呈した』

これは男の最後の捨てぜりふだね。

『画商が言うには、

彼女は、金持ちでもなさそうだし、

まして彼女の足は。。。』

と言おうとして、

彼はハットするんだ」

僕は枯らした涙がでてきてしまった。

ミドリはあきれた顔で僕をみている。

「泣いているの？」とミドリがハンカチを差し出した。

「彼はその絵を探しに彼女の家をウロウロして、隣の部屋で発見するんだ。泣ける、たまらないね」

「つまり、彼女は交通事故で歩けなくなっているのね。なんか、そこは有名よね」

「彼は彼女のところへ行つて、じつと見るんだ。彼女は、そんな目でみないでと言って、上ばかり、つまり天国に近い所ばかり見ていたと言つんだ」

「そしてハッピーエンドね」

「思い出した。」

昔その話をした時に、ミドリは、そんな女性は、いないと言つたね」

「はつきりと言うわ。自分が事故になって歩けない。でも、リハビリ次第では歩ける可能性がある。大半の女性は、そう言うわ」

「このような女性は稀だろうね。アメリカ人で、そんなタイプの女性はいないよね。そこがアメリカでもフランスでも大うけする理由だろう。何も言えないが、わかってほしい。そう、女性って、私を好きならば、何も聞かずにわかってほしいと思う」

「男もそうよ。」

とにかく、『めぐり逢い』の女性は、稀なタイプなの。  
だから感動しない女性もいるんじゃない」

「そうかもしれない。

最近なぜか忠臣蔵で泣けるシーンに  
似ていることを発見したんだ」

「ちょっと飛びすぎ」

「つまり何も言えないけど、わかってほしいだよ。

忠臣蔵では、いくつもそのようなシーンがあるんだけど。

大石内蔵助が故主君の奥方に最後の別れに行く場面だ。

奥方はいよいよ仇討ちをしてくれるために

最後の挨拶に來たと思う。

本当はそうなんだけど、

奥方の周りにはスパイが聞き耳立てている。

大石は郷里に帰るので別れの挨拶にきたと言う。

奥方は、仇討ちしないと知ると大石をけなす。

大石はじつと我慢する。

彼が去った後に手紙が何かで、

仇討ちすることを奥方が知るんだ。

ここは泣ける」

刑務所を出所した男の恋心「男と女の詩」「幸せの黄色いハンカチ」

男の方がロマンチスト、男の心はガラスのハート。

女性は母になる、人類生存のために生き残る必要がある。

母がロマンチストだと人類は絶滅する。

だから現実をしつかりみる。

DNAに刻まれているはずだ。

全部の女性がそうだとは思えないが

現実重視でサバイバルに強いのが女性ではないだろうか。

居直り上手。

「プライドと偏見」の

ジェーンオースティン女史も現実的な女性だと思う。

男は居直れない、ロマンチストといえば聞こえがいいが

現実逃避、いつまでも子供のままでいたい。

脚本家の野島伸司さんが言っていた。

恋人を待ち続けるとする。

あと1日で恋人に会えるのに、

1日が待てないのが男、

女は居直って、あと1日だと思って待てると言う。

恋人のいる男が刑務所から出てくる。

男は気弱になる。

実際に経験はないが自信喪失する。

男は弱い。

女性はどうだろう。

強いというか居直るのだろうか。

映画は「幸せの黄色いハンカチ」

高倉健さんは絡んできたチンピラとの喧嘩で相手を死なせてしまう。

刑務所に入った健さんは離婚を決意する。

面会に訪れた倍賞 千恵子に

「今ならお前はまだ若いし、その気ならいい男もいるかもしれん」。

不器用な生き方しかできない、男の愛情表現。

5年の刑期を終えて出所すると、元妻へハガキを出す。

「もし、まだ1人暮らしで待っていてくれるなら…」

黄色いハンカチをぶら下げておいてくれ、それが目印だ、もしそれが下がってなかったら俺はそのまま引き返して、

2度と夕張には現れないから…」

だが怖くて夕張に直行できない。

何度もためらいながら

行き連れに知り合った武田鉄矢や桃井かおりに押されて

夕張の元住居前に車は進むが、

健さんは怖くて外を見れない。

車で目をつぶっている。

これが男なんですな。

原作はピート・ハミルの短編「黄色いハンカチ」。

「先週、保釈が確実になったとき、久しぶりに女房に手紙を書いたんだ。

おまえが別の男と暮らしているんなら、俺は邪魔しない、と言ってやった。

でも、もしそうじゃなくて。俺を迎え入れて気があるなら、教えてくれ。

バス停前にあるでかいオークの木の枝に黄色いハンカチを結びつけてくれ、

それであれば俺はバスを降りて家に帰るから」

男はそのオークの木が近づくとバスの外が見れないでいる。

さらなる失望に備えるかのように緊張して……。

「男と女の詩」(1973)

フランス恋愛映画の代表作「男と女」、

クロード・ルルーシエ監督の続編

出演：リノ・ヴァンチュラ、フランソワーズ・ファビアン、  
シャルル・ジェラル

筆者が書いた脚本プロット、恋愛物語「SAKIMORI」から引用する

会議が予定より早く終わって、映画雑談になる。

監督「SAK I、『男と女の詩』という映画知ってる？」

この前さ、裕子に尋ねられて、知っていると嘘ついてしまった。

DVD化されてないので、どんな映画か教えてよ」

咲子「クロード・ルルーシユの作品ね」

監督「シャバダバダか」

咲子「『男と女の詩』は、映画『男と女』のエンディングから始まるの」

監督「ほう、まさにシャバダバダだね」

咲子「私は『男と女』より、この作品が好きよ。

ひと言で言うと『黄色いハンカチ』のフランス版ね」

監督「高倉健の『幸福の黄色いハンカチ』の話しかい？」

咲子「そう。

宝石店を襲撃するんだけど失敗して刑務所に入ったが出所するのよ。

タイトルは『La Bonne Année』、

フランス語で新年の挨拶。

Happy New Yearね」

監督「面白そうだ。それで、フランス映画はまったく苦手だね」

咲子「新年を迎えるにあたって出所するわけ、

男には内妻に近い恋人がいたのよ。

でも突然の特赦で釈放されることになる。彼女は知らない。

六年も刑務所に入っていたので、すぐ彼女の家に直行できないの」

監督「健さんと同じだな」

咲子「彼はなかなか帰れない。

やっと迷って、彼女の家の近くまで来て家の中をうかがうわけ。

すると家には見も知らぬ男が主人顔で出入りしているので、

去ること決意する。

でも最後にひとこと、女の声を聴きたくて電話するの」

監督「せっかくなので、お別れと皮肉のひとつも言いたいよな」

咲子「ベットにいた女が電話に出ると隣に他の男が寝ている。

男は『俺だ、出所した・・・』と告げた瞬間に、

女は意外なことを言うの。

その男を追い出して『待っている、すぐ来て』と言うの」

監督「ほほ、それで」

咲子「再会すると、女は言うの

『あなたを待っていたの。』

でも 私は女よ、恋をしていないと女を維持できないの」

男は信用できない顔しながら、黙って彼女の顔を見る。

そこで映画は終わる、おそらく二人で暮らす方に展開しそうに思っ  
たわ」

監督「渋いというか、人生の辛酸をなめた本当の男と女の話だな」

## ジェイン・オースティン（1）今日の恋愛映画の元祖

ジェイン・オースティン（イギリス作家）の作品を

なるべく短く話したいですね。

というのは

今日の恋愛映画の原型を作った偉大なる作家だからです。

映画「ユー・ガット・メール」でメグライアンが言います。

「私は、高慢と偏見を200回は読んでるの」

ジェイン・オースティンの代表作「高慢と偏見」は

タイトルが「自負と偏見」や「プライドと偏見」と、

訳が様々で混乱しますね。

「ブリジット・ジョーンズの日記」

原作者ヘレン・フィールディングはオースティンの「高慢と偏見」を元ネタにして

書いたと告白している。

玉の輿に乗りたけれど、愛情も大事揺れ動く女性心、思い違いなど。

ジェイン・オースティンは紫式部に次ぐ草分けではないでしょうか。

川口喬一「イギリス小説入門」によれば

「小説を、今のような小説にしたのは、オースティンである」と言っている。

平凡な日常生活や平凡な人間の交際をそのままに描いた最初のパイオニア。

夏目漱石は「文学論」で彼女の写実を賞賛している。

Jane Austen【ジェイン・オースティン】は写実の泰斗【たいと（＝名人）】なり。

平凡にして活躍せる文字を草して技神に入る【ぎ、しんにいる】の点に於て、

優に鬚眉【しゅび（＝ひげを生やした男）】の大家を凌ぐ。

余云ふ。

Austen を賞翫する能はざるものは遂に写実の妙味を解し能はざるものなりと。

## ジェイン・オースティン(2) 作風

6 作しか長編小説を残していない。

著作年代順にすると

分別と多感 (Sense and Sensibility、1811年)

高慢と偏見又はプライドと偏見 (Pride and Prejudice、1813年)

マンスフィールド・パーク (Mansfield Park、1814年)

エマ (Emma、1816年)

ノーサンガー僧院 (Northanger Abbey、1817年)

説得 (Persuasion、1818年)

自費出版されて、死後に高い評価を得るようになる。

作品の特徴は後半に一気に面白くなる。

最後のもりあげで

彼女の作品に、かなうものは少ないだろう。

それまでの単調な退屈には我慢を強いられる。

我慢の蓄積が最後の放出となる。

まさに登山の苦痛をしいられる。

彼女は実体験しか書けない。

他の方の評論から同感に思うことは

健全な家庭小説

諸人物は、それぞれの性格の枠の中に

極めて明瞭に捉えられ、あざやかに描き別けられている、  
生きている。

バージニアウルフは言う

「説得」には何か特別の美しさと特別の退屈さがある。

サマセット・モームの評は以下に

「私はジェイン・オースティンが英国の最も偉大な小説家であると

主張しようとは思わない。・・・彼女は完璧な作家なのである。

確かに彼女の世界は限られており、彼女が取扱うのは地方紳士、

牧師、中産階級の人達の狭い世界である。

しかし彼女ほど鋭い人間洞察力を持った者が、

彼女以上に精妙かつ適切に

人間の心の奥底に探りを入れた者が、あつたろうか。・・・

彼女の物語には大した事が起る訳でなく、おおかた劇的な事件は避けられているにもかかわらず、どうしてもそうなるのかは私にも判らないのだが、次には何が起るのだろうと知りたい気持ちに促されて、

次つぎと頁を繰らずにはいられない。

これは小説家に欠くことの出来ない才能である」

## ジェイン・オースティン(3) プライドと偏見

ジェイン・オースティン(3)

### プライドと偏見

「高慢と偏見」又は「自負と偏見」(Pride and Prejudice)

映画「ユー・ガット・メール」でメグライアンが言います。

「私は、高慢と偏見を200回は読んでるの」

映画ではプライドと偏見(2005)というタイトルで

キーラ・ナイトレイが主演。

最初の印象だけで、人を判断してしまう偏見。

思い込みはこわい、真実がみえなくなる。

偏見を高めるのはプライド。

本当に自分を愛している男は誰なのか

勘違い、思い違い。

自分のプライドを傷つけられて嫌いになった男。

それが偏見だったと気づく。

男も最初に彼女を傷つけたのはプライドだったことに気づく、

最後の展開は劇的ですね。

[illegible]

小説は前編後編になっ  
ていて

前編を読み出して、古い文体で、読みづらい、これは悲劇だ。

物語りの筋が理解できない。

わかりやすくするために

訳者は登場人物の名前ぐらい

母と姉とか入れてくれないと、読んでいて誰が誰だがわからなくなる。

タイトルも「高慢と偏見」、「自負と偏見」、「プライドと偏見」と

統一されていなくて混乱します。

作品から印象に残る部分をふたつ。

1・結婚生活の幸福なんて、まったくの運次第だわ。

どんなにお互い知り合っていたところで、

どれだけ結婚前に気が合っていたところで、

幸福が増すわけじゃない。

たいていの場合が、結婚した後に、

どんどん性格ちがいの人間になっていったって、

気まずい思いばかりしている。

そう思えば、

むしろ一生いっしょに暮らそうという人の欠点など、

できるだけ知らないでいるほうがいいのよ。

2・ほんのちよつと惚れたような恋にかぎって、

ラブソングを歌ってしまえば

恋心のほうは、完全に発散してしまうようなものですよ。

## ジェイン・オースティン（４） 愛は貧しさに負ける

ジェイン・オースティン（４）

愛は貧しさに負ける

映画「ジェイン・オースティン秘められた恋」（２００７）

ジェイン・オースティンの自伝的物語です。

原作は伝記作家ジョン・スペンスが発表した「Becoming Jane Austen」

２００３年にファンがビックリすることがあった。

ジェインオースティンの恋愛を発表して全世界のファンの度肝を抜いた。

なんと死後、１８６年経過して。

映画「秘められた恋」

Becoming Jane

監督 ジュリアン・ジャロルド

脚本 ケヴィン・フッド

サラ・ウィリアムズ

出演者 アン・ハサウェイ

ジェームズ・マカヴォイ

脚本家が語る。

「ジェインオースティンは人間の本質を知る作家だ」

主演アンの大学卒論は、ジェインオースティンだった。

愛は貧しさに負ける

時代背景が

結婚することが唯一女性が生き残る道、

裕福な父がいても、父の財産は男性しか遺産相続できない時代。

オースティンは言う。

「貧乏は愛をだんだんに朽ちさせてゆくのだよ」

かけおちの途中で心変わりする。

男「黙ってついてきてほしい。僕を愛しているか？」

「ええ もちろんよ。」

でも あなたの家族を壊すなら、この愛は終わるわ。

（つまり彼女と暮らすことで家族が増えて貧困になる）

本当よ。

ゆっくりと愛は罪悪感と後悔とによってむしばまれていくの」

「バカな、ナンセンスだ」

「真実だわ。」

矛盾から生まれた真実よ。

でも笑顔で お別れしなくてわ。

さもないければ、この愛はニセモノになる、なかったも同じよ」

未婚で全う

本作ではジェイン・オースティン作品のシーンが随所にでてくる。

未婚で一生終えるために、彼女の小説に結婚後はない。

## 北野恋愛映画Dolls（1）思いが太陽より熱くなると

### 北野恋愛映画Dolls（1）

思いが太陽より熱くなると

北野武監督の映画「Dolls」

ドールズ、人形

恋をして、相手への思いが太陽より熱くなることがある。

異常と思えるほど相手を愛しすぎて

太陽より熱くなってしまう。

相手は近づくと焦げてしまい、身を滅ぼしてしまう。

「Dolls」は、3組の男女の恋愛がえがかれている。

本作の日本での評価はすこぶる低い。

僕的には北野作品でナンバーワンである。

涙があふれてくる邦画なのだが、

邦画ではないかもしれない、フランス映画ではないだろうか

あえていえば「ベティーブルー」風だ。

ダマスカス映画祭ではグランプリを取り、  
ロンドンやフランスではロングラン上映、  
モスクワでは2年にわたり上映されたという。

本作は人形浄瑠璃からはじまる、

演じられるのは近松門左衛門「冥途の飛脚」

2人は「生きられるだけ、この世で添おう」という  
刹那主義的な逃避行が始まる

## 北野恋愛映画Do11s（2）お前のために死んでもいい

江戸時代に人気を博した「冥途の飛脚」。

遊女を身請けするために、

客からの預り金を女のために流用してしまう。

女のために犯罪を犯してゆき、恋の逃避行が始まる。

フランソワトリュフォーの「暗くなるまでこの恋を」を連想する。

トリュフォーで一番好きな作品だ。

ジャンポールベルモンドは惚れた女のために

カトリーヌドヌーブ

犯罪を犯して逃避行が始まる。

ドヌーブは逃避行に疲れて、ベルモンドを毒殺しようとする。

警察に追い詰められた山小屋でコーヒーに毒をもる。

飲もうとするベルモンドは、

山小屋に遺された古い新聞記事が目に入る。

白雪姫の毒リンゴの漫画だ。

ドヌーブの視線にも毒リンゴが入る。

ベルモンドはドヌーブを見つめてつぶやく、

「俺は、お前のために死んでもいい」

ドヌーブは我にかえって

ベルモンドーの持つコーヒークップを床に落としてしまう。

二人は雪原をさまよい、スイス国境をめざして歩いていく。

指摘されるように、名作「大いなる幻影」に似た作品だが、

ヘミングウェイの「武器をさらば」も連想させる。

「暗くなるまでこの恋を」は

アンジェリーナ・ジョリー主演「ポワゾン」で、リメイクされている。

北野作品「Dolls」の男女二組目は恋の逃避行の話だ。

二人は「つながり乞食」となって、さまよい歩く

## 北野恋愛映画Dolls（3）つながり乞食

北野作品「Dolls」のストーリーの軸は

「結婚を約束した男（西島秀俊）に振られて、

白痴状態になった女性（菅野美穂）に対して、

責任を感じて1本の赤いひもで、お互いを繋ぎ、最期に心中する」

西島は菅野と寄り添っていれば、いつか正気に戻ると信じている。

まるでフェフェ（フェリーニ）の映画「道」の反省編のようで、

とてもせつない。

号泣して見続けることのできない映画「道」では、

狂ったジェルソーミナをザンパーノは道端に捨て去ってしまう。

そして一生、そのことを後悔してしまうのだ。

「Dolls」映画の進行も「あの夏、いちばん静かな海。」と同じ、

ほとんどセリフなしのサイレント

北野ブルーと言われた単色ではなくて、日本の四季の色にこだわる。

二人は結婚を約束した思い出の場所に到着する。

菅野はその時に、もらったペンダントを西島に見せる。

正気が戻ったように思ったが・・・

北野監督が言う。

「これまで一番、最も暴力的な映画である」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9839p/>

---

恋愛映画を話そうよ

2011年11月15日14時09分発行